

ZHAO Yu

「木彫によって人体を彫刻する」ことに正面から真摯に向き合っている申請者は、確かな造形力を培い、素材との多くの対話を積み重ねながら、丹念に表面（外見）を形作って行くと共に、文字通り内面をも掘り込んで行くことで、自身の一部の喪失や複雑な感情といったものを鑑賞者に想起させるという近作の表現に至ったようです。確かなものになりつつあるこの制作の道すじを基に、どんな変化・展開を見せてくれるか大いに期待します。

園田 こ春

“テキスタイルアート”の従来の意味合いを開いていく取り組みである。空間デザインの要素として“テキスタイル”を用いている。テキスタイルを用いた空間デザインといえるだろう。テキスタイルを用いることで、体感的な・肌感覚としての・身体の記憶と向き合い直す空間が創出されることに期待している。

三村 萌嘉

申請者は、写真というメディアを通じて、関係性を持つものと持たないものの境界に存在する偶然性や親和性を可視化することをテーマに、制作研究を行っています。出力した写真を用いて、切り抜きや重ね合わせ、リピートなどの様々な手法で再構成された作品は、不思議な存在感を放ち、見るという行為そのものに揺らぎをもたらしています。これらの制作行為を通じて、新しい写真表現の可能性が広がることを期待しています。

岡 千尋

夢と精神の感覚を表現するという作品は「現実では自分だけが直接認識できない存在であり夢での自己の存在のあり方が反転している」という作者の言葉にあるように相対する存在として自己と他者を捉えていない不思議な感覚を持ち、そこに面白さを感じた。また片方に確かな現実感があることで甘いイメージに落ち込む事が回避されている。作者の言う夢や精神という別世界が現実味を持って現れる仕組みを真正面から考える態度に将来性を感じた。

萩原 寧音

創作の動機にユーモアがある。妄想力にも注目したい。そこには、表現の原点となる観察がある。観察するワタクシの身体を感じる現世の違和感への批評が感じられる。すでに創作された『Necklace on a building』『Building Organs』は、共に、“大きさ”が作品のエッセンスの要である。“大きなもの”が“ワタクシの身体”の居所を示す仕掛けになっているのだ。

後藤 結依子

小さな石に大きな宇宙を感じ、凝視することから制作が始まっている。これは水石に山水を見る感覚に似ており、この古典的な自然の把握法を現今どう展開させるのか大いに興味を覚えた。水墨画、日本画の近代以降の問題を自身のアイデンティティの問題と絡めて再考しておりそれが単なる画題や技術の焼き直し、崩しではなく宇宙観や人間観といった根源的な視点を掘り下げて制作している。既存の枠組みを内側から食い破るような意気込みを感じる。

馬場 さくら

申請者が掲げる「愛」というテーマは大きなものであるが、沢山のドローイング、沢山の考察、そして実作（そこにはしっかりと素材への理解が伴っている）を重ねて、ある到達点（自身のスタイル）へと至った学部生生活だったのではないかと推察します。応募研究計画では、ギャラリー（マンションの1室）での作品の提示を計画しているとのこと、現時点までの既作やドローイングを見るに十二分に期待できるものと思います。楽しみです。

水口 茉鈴

建築をモチーフとするドローイングをもとに制作されるテキスタイル作品だが、元となるドローイングがまず非常に魅力的だ。線の太さの強弱、微妙な歪み、繊細なグラデーション表現など多岐にわたるテクスチャを感じる。それが複数の技法を組み合わせ、テキスタイルとして表現されている。そこには布の凹凸、起伏による触覚的な多様な変化があり、それを鑑賞する視線は、まるで年の中を散策するかのように立体的に感じられる。

LEE Yurim

作者は自身の不安が制作の発端だという。作者にとって銅版画の技法を使うことは、複数性よりも版による偶然性とひたすら腐蝕を繰り返す行為が目的なのだ。そのような眼で作品を見れば、細かい作業を繰り返すことは不安を紛らわせるために有効かと思えるし、自然物を描くことや左右対称の図像を描くことも、心の安定に役立つかもしれない。このようにモチーフや制作過程自体が治療の過程と重なることで、鑑賞者にも安らぎの一片が伝わってくる。

馬場 優那

交換留学先で訪れた教会や宮殿の、強烈な体験を独自の感覚で解釈し、表現しようとしている。そうした自身の実体験を分析し、スケールの大きな表現で挑戦しようとしている点が評価できる。型染めによるサンプルの図案は、黒一色のみで表現されているが、形やストロークの密度の変化によって非常に立体感や没入感を感じる。また図案に見られるある種の反復と対称性は、聖骸布との類似性も感じられる。非常に完成が期待される作品だ。

波多 みちる

重い過去への言及とは裏腹に、とても柔軟でユーモラスな作品である。鶴見俊輔の限界芸術に通じる志向性を感じ、既存のアートを更新していく予感がある。特に今回の、生活の場における畳の作品は、レジデンスでの制作が適しているように思うので、ぜひその可能性もリサーチしてほしい。

WEN Muxin

作者の主題は無意識だ。ユング派の心理学者が箱庭をその治療に用いたように、コラージュはその人の無意識を掘り起こすのにちょうど良い素材かもしれない。作者はコラージュ作品だけではなく他にもいくつかの方向性を試している。その中で興味深かったのがさびた鉄板の作品だ。意識、記憶、無意識が層になって、作品がまるで自分の存在そのもののように多重構造になっている。使われている版画の技法も、その主目的であった複数性から離れ、版を変えることで起こるコラージュ的な偶然性に注目していることは面白い。

高橋 勇吾

非常に緻密で根気の要る作業を行っている。過去作品でも集合体を造形としているが、単体ではなくユニット化することで多様な表情を見せることに成功している。素材の選択がキーとなるタイプの作品だと思うが、ミミズや鉛筆といった素材に目を付けるあたり、すでに卓越したセンスを感じる。大作にこだわらず、今後も新たな素材をどんどん試してほしい。

吉田 桃

申請者は、自身が執筆した小説に登場する言葉から想起されるイメージを写真に収め、そのデジタル写真をコラージュし、最終的に版画へと展開しています。このように、多層的に再構成されたイメージは、インクや紙に刷るという版画制作のプロセスを通じて、作者の主観を超えた新たな表現へと昇華されます。今後の展開として、絵と文字の融合をテーマにした創作から生まれる表現の世界に、大いに期待しています。

XIE Chaoying

微振動によって水滴が水面に溜まりながら移動するプロトタイプは、シンプルな実験装置の表現と相まって非常に興味深く感じる物理現象を生み出す。一方で泡に似た水滴が不規則性を持ちながら移動すること自体は自然の現象として既視感があると感じてしまうため、果たしてこれが今後アニメシー知覚を生み出せるものになるのか、その動きの中に潜在的に存在する美意識を発見できるのか、更なる試行錯誤の先にある発見に期待したい。

李 誠峻

申請者は、コスチュームデザインと演劇を通して平和共存を表現することに挑もうとしている。対立と紛争が絶えない世界情勢の中で難しいテーマであるからこそ、ドイツへの交換留学は、制作研究を推進させる有意義な機会となるだろう。分断から再統一に至る歴史や文化を調査し、神話の登場人物の新たな衣装をデザインしようと意欲的に計画している。ヨーロッパで盛んなニット表現も実践的に学び、思考を深めた新たな展開を期待したい。

中村 瑛美

申請者は、尾州毛織物産地活性化プロジェクトの活動から、産地の課題を実感し解決の糸口を見つけようと次のステップに挑戦している。尾州ウールの残布を活用し子供服をつくるという明確な計画がある。それは、産地の文化と「つくる責任・つかう責任」を次世代に伝える試みと言える。主観的な視点から制作した卒業制作「自分史」の子供服を経て、アップサイクルと一括りにされることのないユニークな織地の子供服を期待したい。

深津 真彩

写真集の制作がテーマであるが、メディア芸術の学生がデジタル表現の創作を経た後のアナログ表現である紙の写真集にこだわっていることが興味深い。また世界各地の文化や生活を被写体とし、人々の生きざまやエネルギーを自らの切り口で記録することは、依然として平和な世界に至らない現代において、作者の創作活動や生き方そのものにとって得るものが多いと思われる。その成果は見る者に何かを考えさせる表現になることが期待できる。

國見 幸加

多くの化石燃料を使うというモータースポーツのイメージを払拭し、その認知度を向上させるためのレーシングゲームである。特徴として、電気自動車、回生ブレーキ、車の素材選択などの要素を取り入れており、これらに触れる敷居を下げべくゲームというメディアを選んでいる点がよく考えられている。既にある環境配慮の取り組みの再現にとどまらず、モータースポーツ業界への新しい提案が盛り込まれた作品・活動に発展することを期待したい。

五井 佑加子

ヘンリー・ダーガーは、一般にアール・ブリュット、アウトサイダー・アートの文脈における特異な作家として認識されているが、申請者はその宗教的側面等から新たな光を当てることを意図している。現地調査の必要性が高い対象、テーマで、本助成による研究の進展に期待したい。